

民衆運動と 2022 年の政変 —コロナ後のスリランカ—

川 島 耕 司

はじめに

2022 年 7 月 9 日、大統領の辞任を求める抗議者たちはコロンボ市内にある大統領公邸になだれ込んだ。人々が公邸のプールに飛び込む映像は全世界に流れ、多くの人を驚かせた。4 日後の 7 月 13 日、ゴーターバヤ・ラージャパクサ大統領は軍用機で隣国モルディブを経由してシンガポールに逃亡し、その地で辞意を表明した⁽¹⁾。

この政変を引き起こした一連の民衆運動はアラガラヤ（Aragalaya: 闘争）と呼ばれている。この年の 3 月末から 4 ヶ月間ほど続いたこの運動はいくつかの点でそれまでには見られないものであった。多数の市民が参加した抗議運動が独立後のスリランカにおいて発生していたことは事実である。しかしそれらは特定の政党や労働組合によって動員されたものであった。それに対してこの運動は明らかに自発的なものであった。はっきりと統一された組織構造はなく、特定の政党の明確な関与もなかった。また、宗教や民族の分断を越え、多くの若者が動員されたものであるという点でも、あるいはインターネットが重要な役割を果たしたという点でも従来とは大きく異なっていた⁽²⁾。

ある意味特殊なこの運動はどのように生まれ、展開したのか。彼らの運動がおおむね平和的に進み、ラージャパクサ家の権力からの追放というきわめて困難であるとも思われていた成果を達成し得たのはなぜなのか。今後のスリランカ社会に与える影響はいかなるものであるのか。あるいは彼らの運動にはどのような限界があったのか。運動の経緯をふり返るなかで、こうした問題につい

て考えていきたい。

1 コロナ禍と経済危機

コロナ禍は深刻な経済危機をスリランカにもたらした。外国人観光客は激減し、海外の出稼ぎ労働者からの送金も減少した。2020 年の経済成長率は 3.6% のマイナスとなり、外貨準備の減少に歯止めがかからなくなった。2021 年末ごろには外貨準備高は輸入約 1 ヶ月分になっていた。ガソリン等は不足し、給油所には長蛇の列ができた。火力発電用燃料不足による長時間の計画停電が実施され、国民の不満は高まった。急激なルピー安が進行し、ロシア・ウクライナ戦争の影響もあり、輸入価格が上昇し、インフレ率は 2022 年 6 月には 60% 近くになっていた⁽³⁾。食糧不足もきわめて深刻な問題になった。食品価格の高騰のため、8 割の家庭が食事の量を減らし、また約半数の子どもたちが緊急援助を必要とする状況にもなった⁽⁴⁾。2022 年 9 月の国連世界食糧計画（WFP）の報告によれば、スリランカの 3 分の 1 の世帯（630 万人）が食糧不足であり、そのうち 66,000 人が極度に食糧不足の下におかれていた⁽⁵⁾。

この経済危機をさらに深刻化させたのは化学肥料を禁止するという 2021 年 4 月の政府の決定であった。そもそも大統領は彼のマニフェストにおいて 10 年で有機農業へと転換することを明示していた。コロナ禍による外貨不足に対処するために十分な準備もないままにこの転換を前倒しして彼は行おうとしたのである。その結果、農業生産は激減した。米の生産は 4 割減となった。こうしたなかで、2021 年 5 月以降、農村部ではこの決定への抗議運動が行われるようになった。2021 年 9 月には中国からの有機肥料に有害なバクテリアが含まれていることが判明し、人びとの反発はさらに高まった⁽⁶⁾。

閣僚等の重要役職のきわめて多くがラージャパクサ家によって占められていたことは人々の不満をさらに高めた。国家予算のほぼ 75% はこの一族のメンバーがさまざまな省庁を通じて監督しているという状況であった⁽⁷⁾。こうしたラージャパクサ王朝とも呼ばれた体制、そして社会にはびこる汚職や不正義に

対する国民の不満は経済危機のなかでますます高まることになった⁽⁸⁾。

2 アラガラヤの始まり

ラージャパクサー族の政治支配に不満をもつ人びとは2022年3月になるとプラカードを掲げ、ろうそくを手にして街角に立つという形で抗議行動を始めた。最初にこれが行われたのはコロンボのコフワラ地区の道路脇であったとされる。この時集まったのは6人ほどであったが、翌日には50人ほどになり、その後同様の動きはコロンボの主要地点、そしてスリランカ各地へと広がった⁽⁹⁾。

この動きが一気に加速したのは幾人かの人びとが2022年3月31日にコロンボのヌゲゴダ地区にある大統領私邸前で抗議行動を始めてからだだった。彼らは最初は数人で夜を徹した平和的な抗議行動を行おうとした。しかしそれはすぐに多くの人びとに注目されるものになった。ソーシャルメディアなどでこの情報が拡散されるなかで、何千という男女が集まった。政府はその翌日、つまり4月1日に、催涙ガスと放水銃によってこの平和的な抗議行動を鎮圧しようとした。4月2日からは36時間の夜間外出禁止令を発動した。こうした政府の強権的な姿勢は逆に人びとの怒りを高めた。それ以前からラージャパクサ政権に対する抗議行動は散発的に続いていたのであるが、この時の出来事が主要なターニングポイントになった。そのため2022年3月31日のこの行動がアラガラヤの始まりであるとみられている⁽¹⁰⁾。

4月9日には大統領府に隣接するゴールフェイスグリーンで大規模なデモが行われた。ソーシャルメディアが活用され、数十万人が集まり、ラージャパクサ政権の打倒が叫ばれた。大統領府付近にはテントが張られ、それは半恒久的な抗議サイトとなった。この占拠地はGotaGoGama（「ゴーターバヤは出身地に帰れ」の意）と呼ばれるようになった⁽¹¹⁾。キャンディ、ゴール、ニゴンボ、アンパーラにも同様の抗議サイトが生まれた⁽¹²⁾。

この運動を通じて、ソーシャルメディアはきわめて重要な役割を果たした。総人口約2200万人のスリランカに800万のアクティブなフェイスブック・ア

カウントがあった。インターネットの危険性に気づいた政府は 4 月 2 日にいくつかのソーシャルメディアを禁止した。しかし多くは VPN を使ったため禁止の効果は薄かった⁽¹³⁾。

運動はおおむね平和的なものであり、催涙ガスと放水銃が鎮圧のための手段の中心であった。4 月にランブッカナ（Rambukkana）という地方都市で警察が抗議者たちに発砲し、一人が死亡、14 人が負傷するという事件があったことは事実である。しかし警察がその後実弾を使うことはなかった。逆に、抗議者のなかには過激で暴力的な手段をとる者たちがあった。5 月にはラージャパクサ派の政党である SLPP の国会議員の家数軒が襲われ、そのうちいくつかは放火された⁽¹⁴⁾。ただ、こうした暴力的な行為は例外的なものであった。運動は概ね平和的に推移した。

3 参加者のコミュニティ

公的にいかなる指導者も明示されなかったという点でこの運動はユニークであった。大統領の退任、あるいはラージャパクサー族の追放を基本とする特定の要求があったのみである。FSP（Frontline Socialist Party）と IUSF（Inter University Student Federation）が重要な役割を果たしたという指摘もあるが、彼らは公的にはそれを認めていない⁽¹⁵⁾。

4 ヶ月程度続いたこの運動にはさまざまな社会的、民族的、宗教的背景をもった人びとが参加した。この点も今までに見られないものであった。表 1 にもあるようにすべての民族的、宗教的背景をもつ人びとが参加し、民族間の連帯が表明されることもあった。これはそれまでの政治的動員の性格とは大きく異なるものであった。独立後のスリランカにおいては動員は基本的に民族ごとになされ、異なる民族集団が一つの目標を掲げて政治運動を行うことはほとんどなかった⁽¹⁶⁾。

表1 アラガラヤへの参加経験

(「あなたは2022年3月から7月までの期間にあなたの近隣地区またはその他の地域において行われた抗議運動に一つでも参加しましたか」への回答)

民族	はい	いいえ	分からない	回答数
シンハラ人	25.4%	73.7%	1.0%	832
タミル人	15.6%	79.2%	5.2%	77
高地タミル	25.6%	71.8%	2.6%	78
ムスリム	19.8%	79.0%	1.2%	81

出所：CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya* (Colombo: Centre for Policy Alternatives, 2023), p.13

宗教的に言えば、仏教のみでなく、カトリック、イスラームの聖職者が参加した点も注目される。さまざまな背景をもった参加者たちはそれぞれの個別の要求をも表明した。農民たちは化学肥料禁止への抗議を行い、教師たちは給料の未払いを訴え、カトリック教徒たちは2019年のイースターテロの真相究明を求めた。このテロで教会が爆破され、非常に多くの信者を失ったカトリック教徒たちは政府はテロの真の責任者を隠していると非難してきた⁽¹⁷⁾。

しかしアラガラヤへの参加を躊躇した人びとがあったこともまた事実である。特に北部のタミル人たちにそれは多かった。彼らもまた経済危機の影響を受けたことは間違いない。また、シンハラ仏教ナショナリズムに依拠し、内戦時も、そしてその後においても北部のタミル人たちの人権を侵害してきたラージャパクサー族の支配に対して彼らが大きな反発を感じてきたことは明らかである。特にゴーターバヤは内戦時の国防大臣であり、その時の民間人殺害などで彼を戦争犯罪に問おうとする動きもある。内戦終了間近の数か月間に少なくとも4万人のタミル人市民が命を落とした⁽¹⁸⁾。また、ゴーターバヤ政権成立後は多数派主義的な政策が次々に行われた。彼が大統領になるやいなや、北部の道路の多くにはチェックポイントがつくられた。軍の情報部などによるNGOや市民社会への監視はより厳しくなった。国歌をタミル語で歌うのを禁じたのも彼であった⁽¹⁹⁾。このような大統領に対してタミル人たちが強い憤りを抱いていたことは明らかである。

それにもかかわらず北部のタミル人たちが参加しなかったのは、彼らにはアラガラヤが南部の特権的な人びとによる運動だと思えてしまったからである。北部のタミル人たちはこの運動以前にも政府軍に連行された親族の解放や政府に接収された土地の返還を求めるデモなどを行っていた。しかしそのたびに逮捕され、殴打されるという経験をしてきた。南部の人びとが今ゴールフェイスで行っていることと同じことをすれば射殺されうるという認識が彼らにはあった。南部で行われているような「抗議行動はスリランカでは特権」であり、それは北部のタミル人たちには与えられていないものであると思えた。またアラガラヤを行っている人びとにはタミル人たちが抱える諸問題は理解されないだろうという諦めもあった。経済が回復すれば民族的友好関係もまた消え失せるという見方もあった⁽²⁰⁾。

そうえ、アラガラヤのなかで仏教ナショナリズムの色合いがみられたことも確かである。抗議運動においては国旗や仏教徒の旗がたなびき、シンハラ仏教ナショナリズムを称える歌が歌われたこともあった。タミル人たちが抱える問題が表明されることもわずかであったと言われる⁽²¹⁾。内戦終結を記念し、5月18日にタミル語で国歌を歌い、内戦末期のムッライティップでの虐殺を悼む催しを行うことが計画されたが、仏教僧の反対で行われなかったということもあった⁽²²⁾。こうしたことが北部のタミル人たちの足をますます遠のかせたことは間違いない。

4 大統領と逃亡と占拠地への襲撃

2022年7月に抗議者たちが大統領公邸などになだれ込み、大統領が国外逃亡したことはこの運動の明確な成果である。しかしこの運動の終焉はひどく暴力的なものとなった。そして明らかにその暴力行為の責任は新たに大統領となったラニル・ウィクレマシンハにあった。彼は有力な UNP の政治家ではあるが、当時きわめて不人気であった。2020年の選挙では選挙区では落選した。かろうじて全国リスト（National List）で当選できたのである。彼が率いる UNP は

かつての面影は全くなく、議会に保有する議席は彼の1議席のみとなっていた。それにもかかわらず彼が大統領に選出されたのは、国会内で多数を占めるラージャパクサ派の議員たち、特にマヒンダ・ラージャパクサの支持があったからであった⁽²³⁾。

ウィクレマシンハは2022年7月20日に大統領に就任した。その直後、つまり21日から22日にかけての深夜、軍隊と警察が抗議者たちの占拠地に送られた。その時200人から300人のデモ隊が残っていたと言われる。軍隊と警察は無警告で彼らに襲いかかり、占拠者たちを激しく殴打した。占拠者たちは22日午後までには退去することをすでにそれ以前に表明していた。それにもかかわらず有無を言わせぬ暴力が彼らにふるわれたのは、彼らに「教訓」を与えるためであったと解釈された。この行動を少なくとも黙認したこと、そしてラージャパクサ派の政治家を閣僚に指名したことによってそれまでの姿勢を大きく変えないというメッセージをウィクレマシンハは発しているのだと多くの人びとは受け止めた⁽²⁴⁾。

おわりに

この運動は深刻な犠牲者をほとんど出すことがなく概して平和的に進み、ラージャパクサー族の政治からの追放という目標を達成することができた。しかしなぜゴーターバヤ・ラージャパクサ大統領はこの運動を徹底的に鎮圧しようとしなかったのであろうか。

まず、言うまでもなく、未曾有の経済危機の中で人々の不満が極度に高まっていたことは明らかに重要である。そのようななかでは、政府の対応次第では抗議者たちが統制不可能なほどに暴徒化する可能性はあった。ラージャパクサー一族が最も恐れたのは、その結果、一族の政治的影響力のみでなく、生命、財産までもが徹底的に剥奪されることではなかったか。彼らはそれだけは避けたかった。スリランカの他のエリートたちにとっても明らかに社会的混乱はできる限り避けるべきことであった。混乱が深刻化するなかで社会を根底から変え

ようとする勢力が現れる可能性もあるからだ。

その点で、明確な政党の関与がなく、運動がもっぱら自発的なものであり、最終目標をゴーターバヤの追放とするだけの指導者のない集団によって行われたものであったことはラージャパクサー族を含むスリランカの支配層にとっては好都合であった。その目標がかなえば運動が求心力を失うことは容易に想像できた。運動に集まった人々は大統領追放後に政治権力を奪い、スリランカの極端に不平等な政治経済システムを抜本的に変革しようとまでは明らかに考えていなかったように見える。その意味でアラガラヤは壮大なガス抜きであったといえなくもない。

ラージャパクサー族にとって議会において多数派を占めていたことも幸いした。ウィクレマシンハ新大統領はラージャパクサ派によって選ばれたので、彼らの意向に従うしかなかった。ラージャパクサ派のスリランカ人民戦線(SLPP)を中心とする連合勢力は 2020 年 8 月の総選挙で総議席数 225 のうち 150 議席を獲得していた⁽²⁵⁾。実際、一応のガス抜きの後、新大統領は就任後間髪を入れず運動を弾圧した。こうしてスリランカは以前のような権威主義的な多数派主義国家に戻ってしまったようにも見える。北部のタミル人たちの多くが消極的であったことや抗議運動においてシンハラ仏教ナショナリズム的な動きがあったこともまた事実である。スリランカの今後については決して楽観はできない。

しかしこの運動がスリランカの民主化の歴史における重要な出来事であったこともまた事実である。はっきりとした指導者もなく、政党による明確な支援もなかったにもかかわらず多くの人びとが自発的に集まり、大統領の追放という当初の目的を達成した。そのことがスリランカの人びとに一定の自信を与えたことは明らかである。逆に統治者たちには間違いなく重い警告になった。つまり民衆の声に応えない政治家たちはこのような形で追放されうると警告である。ソーシャルメディアが有効に活用され、運動に大きく寄与したことも今後の政治に与える影響は大きい。人びとがネット空間を通じてかなりの政治的勢力になりうることをこの運動は示した。

ウヤンゴダが指摘しているように、アラガラヤは、「都市や農村の中産階級、

農民、学生、女性などからなる市民という非エリートや従属的な社会階層の広範な社会的連携によって遂行される民主主義を求める闘争が、非民主的な体制への組織化されない抗議であったとしても、いかに民衆のために民主主義を取り戻すという社会的希望を回復することができるかを示した」⁽²⁶⁾。確かに北部のタミル人たちのほとんどが参加をためらったという問題はあった。しかし、民族や宗教の分断を越えるという動きがあったこともまた事実である。アラガラヤがスリランカの民主主義の歴史に残る重要な出来事であったことは間違いない。今後この運動がどのような影響をスリランカ社会に与えるのかはきわめて重要な論点となりうると思われる。

注

- (1) 「スリランカ大統領、軍用機で国外脱出 辞任直前に」*BBC News Japan*, 2022年7月13日, <https://www.bbc.com/japanese/62145291> (2023年11月2日に閲覧)。
- (2) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya* (Colombo: Centre for Policy Alternatives, 2023), pp.1, 9, https://www.cpalanka.org/wp-content/uploads/2023/05/A-Brief-Analysis-of-the-Aragalaya_Final-Report.pdf (2023年10月31日に閲覧) ; Jayadeva Uyangoda, 'Sri Lanka's Aragalaya in 2022: Citizens Reclaiming Democracy and Agency', in Jayadeva Uyangoda (ed.), *Democracy and Democratization in Sri Lanka: Paths, Trends and Imaginations* (Colombo: Bandaranaike Centre for International Studies, 2023), vol.2, p.308.
- (3) 堀江正人「スリランカ経済危機の背景——経済危機の根本原因はコロナショックではなく過去の経済運営にあり」三菱UFJリサーチ & コンサルティング, 2022年10月13日, 1-3頁, https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2022/11/report_221013_01.pdf (2023年11月2日に閲覧) ; 荒井悦代「2021年のスリランカ——コロナ禍と外貨危機に迷走するラージャパクサ政権」『アジア動向年報』2022年, 530頁, https://www.jstage.jst.go.jp/article/asiadoukou/2022/0/2022_521/_article-char/ja/ (2023年11月2日に閲覧)。
- (4) Alan Keenan, 'Sri Lanka's Uprising Forces Out a President but Leaves System in Crisis', 18 July 2022, <https://www.crisisgroup.org/asia/south-asia/sri-lanka/sri-lankas-uprising-forces-out-president-leaves-system-crisis> (2023年11月2日に閲覧) ; Alan Keenan, 'For Lanka, A Long Road to Democratic Reform Awaits', 25 July 2022,

- <https://www.crisisgroup.org/asia/south-asia/sri-lanka/lanka-long-road-democratic-reform-awaits>（2023 年 11 月 2 日に閲覧）。
- (5) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, p.48.
- (6) ‘Neil DeVotta on the Protests in Sri Lanka’, *Democracy Paradox*, 2 August 2022, <https://democracyparadox.com/2022/08/02/neil-devotta-on-the-protests-in-sri-lanka/>（2023 年 11 月 2 日に閲覧）；CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, pp.32, 53.
- (7) Neil DeVotta, ‘Sri Lanka: The Return to Ethnocracy’, *Journal of Democracy*, 32, 2021, p.107; ‘DeVotta on the Protests in Sri Lanka’.
- (8) A.R.M. Imtiyaz, ‘Janatha Aragalaya: The People’s Struggle in Sri Lanka’, *Journal of Governance Security & Development*, 3 (2), 2023, pp.7-9.
- (9) Kamanthi Wickramasinghe, ‘How a little protest grew to a loud people’s roar’, *Daily Mirror Online*, 20 May 2022, <https://www.dailymirror.lk/plus/How-a-little-protest-grew-to-a-loud-peoples-roar/352-237345>（2023 年 11 月 2 日に閲覧）。
- (10) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, p.6.
- (11) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, p.21.
- (12) Dishani Senaratne, ‘Beyond the Slogans: How the “Aragalaya” was characterised by Sinhala Buddhist Nationalism’, 14 August 2023, <https://blogs.lse.ac.uk/southasia/2023/08/14/beyond-the-slogans-how-the-aragalaya-was-characterised-by-sinhala-buddhist-nationalism/>（2023 年 11 月 2 日に閲覧）。
- (13) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, p.58.
- (14) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, pp.34, 38, 39.
- (15) Imtiyaz, ‘Janatha Aragalaya’, p.6.
- (16) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, pp.12, 13.
- (17) CPA, *A Brief Analysis of the Aragalaya*, pp.13, 14.
- (18) ‘Sri Lanka: Rights group seeks ex-President’s arrest’, *DW*, 24 July 2022, <https://www.dw.com/en/rajapaksa-accused-of-war-crimes/a-62580019>（2023 年 11 月 11 日に閲覧）。
- (19) DeVotta, ‘Sri Lanka: The Return to Ethnocracy’, p.108.
- (20) Imtiyaz, ‘Janatha Aragalaya’, pp.4, 10; Hannah Ellis-Petersen and Rubatheesan Sandran, ‘“We want justice, not fuel”: Sri Lanka’s Tamils on north-south divide’, *The Guardian*, 22 June 2022, <https://www.theguardian.com/world/2022/jun/22/sri-lanka-tamils-protests-economic-crisis>（2023 年 11 月 2 日に閲覧）。
- (21) Senaratne, ‘Beyond the Slogans’, pp.4, 6.

- (22) *The Guardian*, 22 June 2022.
- (23) Imtiyaz, 'Janatha Aragalaya', p.10; Keenan, 'For Lanka, A Long Road to Democratic Reform Awaits'; 'Neil DeVotta on the Protests in Sri Lanka'; 荒井悦代「なぜ、スリランカで抗議行動は起きたのか? ——経済危機から政治危機へ」2022年4月, https://www.ide.go.jp/Japanese/IDEsquare/Eyes/2022/ISQ202220_009.html (2023年11月2日に閲覧)。
- (24) Imtiyaz, 'Janatha Aragalaya', p.10; Keenan, 'For Lanka, A Long Road to Democratic Reform Awaits'; 'Neil DeVotta on the Protests in Sri Lanka'.
- (25) 'Mahinda Rajapaksa-led SLPP registers landslide victory in Sri Lanka's parliamentary polls', *Hindustan Times*, 7 August 2020, <https://www.hindustantimes.com/world-news/mahinda-rajapaksa-led-slpp-registers-landslide-victory-in-sri-lanka-s-parliamentary-polls/story-oIfCmwPQlInfKRCeU3ETUO.html> (2023年11月11日に閲覧)。
- (26) Uyangoda, 'Sri Lanka's Aragalaya in 2022', p.310.